

「戦争作家」と呼ばれて

— 火野葦平と文化人公職追放 —

ノンフィクション作家 三山 喬

北九州市北西部で細長く内陸に入り込む洞海湾。その湾口に比較的近い旧・若松市（現・北九州市若松区）には、明治時代、遠賀川上流・筑豊炭田で掘られた石炭の積み出し港が建設され、石炭の時代が終焉する一九五〇～六〇年代まで街は中国地方や四国、九州全域から集まった港湾労働者の活気に溢れていた。

上海バンド（外滩）ならぬ「若松バンド」とも呼ばれる海岸通りには、現在でも明治・大正期の石造りの建造物が建ち並び、レトロな雰囲気を漂わせる。

火野葦平の街

私にとって若松への十二年ぶりの旅。その目的は、

を行き来する渡船の船着き場には、若松の街をイラストで紹介する「火野葦平文学散歩地図」が大きなパネルにして掲げられている。辻々にある史跡の案内板にも、火野の名が随所に登場する。

若松区がここまで力を入れ、火野葦平の街であることをアピールしているのは何よりも、小説が何度も映画化されてきたベストセラー『花と竜』（一九五二～五三年、『読売新聞』に連載）がまさしく戦前の若松港を舞台とした物語だったためだろう。

愛媛から北九州に来て沖仲士（港湾労働者）となった主人公・玉井金五郎が広島出身のマンという女性と結ばれて、荒くれ者ぞろいの若松で一番の沖仲士の親分になってゆく。そんな物語の主役は火野葦平の父と母。そう、往時の若松の繁栄を象徴する侠客の一代記は、火野自身の「ファミリーヒストリー」だったのだ。

ただ私の火野への関心は、そのこととは別だった。彼の存在を国民的作家にまで押し上げた初期の代表作『麦と兵隊』をはじめとする「兵隊作家」としての側面を、私は掘り下げたいと思っていた。

早稲田大学文学部を中退し、港湾荷役会社「玉井組」で父・金五郎を手伝うようになった火野は、一方

この土地が生んだ戦中・戦後の人気小説家・火野葦平について調べることだった。福岡と北九州両市への取材の一日を若松に割いただけだった前回とは異なり、今回はゆつたりした旅程を組み、調査や資料集めをする傍ら、港を一望する高塔山に登ったり、海岸通りを散策したりして、没後六十四年、全国レベルでは文学史に名を残すだけの存在になりつつあるこの作家が、地元ではいかに現在も敬愛されているか、そのことを改めて実感した。

たとえば街の玄関口・JR筑豊本線若松駅正面にある市民会館では、その二階の三分の一ほどが「火野葦平資料館」になっていて、そのことが会館の外部にも大きく掲示されている。洞海湾の対岸、戸畑区との間

で地元の文学仲間らと『九州文学』などの同人誌で交流した。昭和十二（一九三七）年、中国大陸に行く部隊に召集され、故郷を発つ直前に書き上げた『糞尿譚』がその翌年、芥川賞を受賞して、そのことを中国の戦地で知らされる。

これをきっかけに火野は軍の報道班に配属され、さまざまな従軍取材で書き上げた『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』の「兵隊三部作」はトータル三百万部を越す大ベストセラーとなった。日米開戦後も旧満州やフィリピン、ビルマ（ミャンマー）に従軍し、戦地での兵士の姿を書き続けた。

ところがこのような活動が戦後は仇となり、火野の立場は暗転する。「戦争協力者」というレッテルを貼られてしまうのだ。GHQの指示のもと進められた各界の公職追放で昭和二十三（一九四八）年四月、火野は石川達三や尾崎士郎、丹羽文雄、山岡荘八など三三〇人の文筆家とともに、「文筆・言論その他によって、好戦的国家主義ならびに侵略の積極的代表者たることを示した者」に指定された。私の今回の取材目的はまさにこの出来事をめぐることだった。

その本題に入る前に、私がなぜ火野のケースからこ